

子どもの心もでこぼこについて—心理教育相談の現場から

(『子どもの文化』2004年11月号掲載文に加筆訂正)

松波幸雄

道路舗装の体験

私は仕事から、不登校や引きこもりなどの子どもたちとお会いすることが多く、いろいろ考えさせられることが多いのですが、まずはあえて、私自身の子どもの頃のある体験からお話ししたいと思います。

その体験というのは、私と同世代の人にとってはとりたてて珍しいことではなく、「地面がなくなっちゃった」体験、つまり道路舗装の体験です。ただ、自分自身の内面的な体験を中心にお話ししていきますので、かなり主観的な内容になることをお許しいただきたいと思います。

私は大阪市浪速区、まあ大阪の中でも、とくに大阪っぽいんじゃないかと思われるノリの、下町の出身です。今では想像もつきませんが、大阪のど真ん中といっても、私が小さかった30～40年前頃は、幹線道路を除くほとんどの道路はまだ土のままでした。

私が小学校3年(1970年)頃だったと思うのですが、ある日学校から帰ってくると、家の前の地面が一面灰色の砂利で固められていました。私には一体何が起こったのかさっぱり分かりませんでした。さらに数日後、また学校から帰ると、私の家の前の道は、鏡のようにまっ平らで無機質で、それでいておぞましいほどに青黒いアスファルトという蓋によって、とうとう完全に閉じ込められていたのです。

私のその光景に茫然とし、母親だったかおばあさんだったかに、「道路はいつ元にもどるん？」と尋ねずにいられませんでした。しかし答えは「そんなん、もうずっとあのままや」という素っ気ないものでした。その瞬間私の中に最初に湧いてきた言葉は、「何で僕らにも前もって相談してくれなかったんやろう」という、誰に向ければいいのか分からない、強い怒りと悲しみを含んだ疑問だったことを覚えています。その喪失感は、30年以上たった今でもほとんど目減りしないほど強いものでした。

私の家は木材加工の町工場だったので、おが屑や木っ端、釘や金槌などの室内遊び道具にこと欠かなかったことは、せめてもの救いだったかもしれませんが、もうビー玉遊びも、棒1本・小石1個で地面に絵を描くことも、家の前ではできなくなりました。道端に生えた雑草の根っこの下で、蟻たちがどのように活動しているかを、日がな一日観察することもできなくなりました。私にとって蟻の巣の観察は、まさに土の下に存在する異世界の探索でした。

土の道の片隅には、季節によって異なる雑草が生えたり、枯れたりします。また穴を掘

れば穴があき、土を寄せれば山ができ、と、無数の表情があるばかりでなく、こちらの働きかけをきちんと受け止めて変化してくれます。それでいて、一日雨が降れば、その生々しい跡形は人間が物事を忘れてしまうように見えなくなります。だから私にとって土の地面とは、自分の存在を映し返してくれるばかりでなく、感情や攻撃性を吸収してくれ、またそれゆえに、近所の仲間と共有できる、代わるもののない愛着の対象だったのです。ですから、学校帰り、ただ足元の小石や草や水溜りのアメンボにちょっかいを出すだけの道草すら、私は楽しくて仕方ありませんでした。私の経験から見るかぎり、アスファルトの道路はこの役割をまったく果たしませんでした。

舗装道路だと、サッカーやキャッチボールなど、外向的な遊びは前よりもやりやすくなりましたが、私のような内向的な子どもにとっては、道路舗装は痛手以外の何ものでもありませんでした。やがて表面的には、みな舗装道路に慣れてしまったように見えてましたが、それと反比例するように、大半の子どもはあまり外では遊ばなくなりました。

少し離れた公園まで行けば土の地面はありましたが、子どもにとっての心理的テリトリーはそれほど広くありません。それに、「ここは遊ぶ場所」と他人に決められた場所で無心に遊べるのは、ごく幼い頃だけです。自我の芽生えに伴って、子どもは自分で遊ぶ場所や遊び方を選ぶようになります。例えば、少し大きくなった子どもは、公園でも塀やフェンスや街灯といった本来遊具でないものを遊び場にし、大人には到底考えつかない遊びを始めます。

そもそも「遊び」という言葉には「自由である」という意味がすでに含まれており、他人に決められた物・場所で、決められたように遊ぶというのは、本来の意味での「遊び」とはいえないのではないかと思います。テレビゲームの普及について、私は必ずしも反対ではありませんが、決められたプログラムの中に狂ったようにのめりこむ子どもたちの姿には、やはりある痛々しさを感じさせられます。いくらのもりこんでも、決して「自分」というものを映し返してくれないので、いつまでたってもそこから離れられないという現象が起きているように見えるからです。

今から思えばこの道路舗装というできごとは、少なくとも私にとっては、故郷を失ったといってもよいほどの体験だったように感じています。それから1~2年後、私は不登校にこそなりはしませんでした(当時不登校の小学生は皆無でした)、学校にいても家でご飯を食べていても、理由もなくただ涙が出てきて仕方ないという抑うつ症状に、2週間ほど悩まされました。心の深い場所が傷ついた場合、それが症状として現れるにはある程度の期間が必要なのです。

たしかに、あらゆる道路の徹底したアスファルト舗装は、車社会という新しい社会への変化を加速させ、飛躍的な経済効果をもたらして、1960~70年代の高度経済成長に力を与えたことは間違いありません。アスファルトというのは原油を最初に加工する段階でできる沈殿物、つまり石油の搾りカスです。石油製品を大量生産し、石油から生成された燃料で人や物を運び、一方道路は走りやすいようにその搾りカスで固める。なんというムダの

ない仕組みでしょうか。しかも、住民にとっても、雑草を抜いたり玄関の土を掃き出す手間もなくなりました。こういった仕組みにとっては、土のでこぼこ道など、ムダ以外の何ものでもありません。

しかし、こういった一見ムダなものを排除する仕組みが、いかに人間にとって大切なものを物心両面から破壊してしまったか、はかりしれないものがあります。土中の微生物や昆虫の生態系も壊されましたが、私自身の体験からも分かるように、子どもの本能的で自然な心、内面の世界までも、相当深いレベルで破壊してしまったのではないかと思うのです。

心のでこぼこ

昨今よく指摘されるように、キレやすい子どもたちが増えている、つまり、多くの子どもたちの感情表現が、衝動的・爆発的で単調になってきたことは、やはりどうやら事実のようです。

私はこのことを、人間の本能や情念といった形で表現される心的エネルギー、リビドーを受け止めるべき「心のヒダ」「心のでこぼこ」が、極端に少なくなってしまった結果ではないかと考えています。もう少し正確に言えば、それは、とくに感情を中心とした心の構造の複雑さ、多様さということですが、人間の情緒面は、人間や動物・物との豊かな関係や、きちんとした別れの経験（暴力的な剥奪ではなく！）によって育まれます。

イメージとしては、「ヒダ」や「でこぼこ」のない心とは、水がサーッと流れていってしまふガラス板のようなものですが、リビドーを受け止めることのできる感情豊かな心とは、水を吸収したりためておくことのできるスポンジのようなものだといえるでしょう。

この「でこぼこ」があるかないかという対比は、土の道と舗装道路の違いとよく似ているのですが、明治時代以降の河川においても、まさにこのイメージと同じような変化が起きました。

武田信玄の治水に代表される日本の伝統的河川工法は、「河川の洪水は、山や森の豊かな養分を耕地にもたらす恵みである」、という前提のもとに考えられていたので、堤防のあちこちに低くなった部分、つまり耕地への水の取り込み口がわざと作られました。それは同時に、大雨の後の大きな川のエネルギーが家々を破壊しないための水の逃げ口でもあり、加えて、増水しても川の流れが緩やかであるように、川の護岸や川底にはあえて聖牛せいぎゅうや出しとよばれるさまざまな障害物、つまり「でこぼこ」が設けられました。こういった治水の考え方は、川を陸地から遮断する現在の治水の発想とは異なり、「減勢治水」とよべます。それらの障害物はさらに、魚をはじめとする水中生物の巣となり、川を中心とする生態系全体を育み、その恵みを人間にも与えてくれました。

明治政府から最初に招かれた外国人土木技師の一人であるオランダ人デレーケは、日本

各地の河川をつぶさに観察しその特性を見極めて、河床傾斜の急な日本の河川には日本古来の河川工法がもっとも適しているとの結論を出しました。しかし、かえってそのことによって、彼は殖産興業・富国強兵をうたう明治政府から排除され、代わってイギリス人技師が登用されて、結果的には今日の日本の河川工事の基となるような工法で、日本の一級河川の姿を一変させてしまいました。当時、軍事産業を中心とする重工業の発展のためには、河川を運河として活用する必要があったからです。

現在の河川工法は、陸地と水、あるいは上流と下流を、コンクリートの護岸やダムによって、「でこぼこ」のない線できっぱりと分けます。洪水はできるだけ起きないほうがいいという発想から、山から流れてきた水は人間が 100 パーセントコントロールし、排水の運搬や飲料水としての用が済めば、一刻も早く海に流し込んでしまう目的のためです。しかし、こういった力づくの治水法は、深刻な自然破壊をもたらすばかりでなく、その存続のために莫大な国費を投じ続けなければなりません。長野県で最初にあげた「脱ダム宣言」の発想は、こういう川特有の弊害から始まっています。

河川工法の変化が、直接子どもたちの心に与えた影響は大きくないかもしれませんが、その変化のあり方がどこか似ているというのは、決して偶然ではありません。つまりこれらは、見た目がムダ・厄介に見えるものはすべて排除してしまうという、近代以降の風潮が生み出した二つの姿なのです。私には、映画『千と千尋の神隠し』において、主人公の千尋が二人の川の^{ぬし}主を近代社会の負の遺産から救い出し、代わりに自らの人生から逃げない態度、真に自分として生きる姿勢を手に入れたことは、きわめて深い象徴性を含んでいるように感じられました。

カウンセラーにできること

できないこと

ところで、今日、カウンセラーという職業は日増しに社会に認知されつつあり、同時にカウンセラーを志望する若者の数も、少子化の流れに逆行していまだ増加の一途をたどっています。しかし、なぜ人々がカウンセラーにこれほどまでに大きな社会的役割を期待し、また自らもその仕事をしたいと考えるようになったのでしょうか。私は、何よりもまず小さな地域社会—いわゆるご近所づきあいが希薄になり、その機能に代わるものが必要とされている結果だと考えています。

近所づきあいがいい形で機能している場合、子育てはそれぞれの家庭の親だけがするものではなく、ご近所全体が行なうものとなります。子育てを助けてくれる人がいる分、子育てに対する親のプレッシャーも少なかったように思います。

例えば、頼まなくとも向かいのおばあちゃんが子どもを見ていてくれるだろうという安心感があれば、ある程度子どものことを忘れて家事や家業に集中することができます（も

もちろん自動車が少なかったことも関係していますが)。これは、実は子どもの側からも大切なことで、大人の監視や管理から外れた場所で、自分たちだけで何とかやっていくことに喜びが生まれ、集団への適応能力、あるいは集団を治める能力の成長がスムーズに行なわれます。またこのことは、地域社会が子どもたちの心の育成に役立っていたばかりでなく、子どもや年寄りの存在がご近所をつなぎ、縁の下の力持ちになっていたことをも意味します。

とにかく、たった一組の親が子育ての全責任を負うというのは、とてつもなく難しい、というよりもほとんど不可能と言わねばなりません。児童虐待を非人道的と非難し、その親や児童相談所を責めたてるばかりでなく、虐待が増加せざるをえない現代の社会状況を自覚し、改善する道に、一刻も早く私たちはふみ出さねばなりません。

私の生まれた街では、子どもたちがあまり外で遊ばなくなるにつれて、小さな神社のお祭りがどこか白けたものとなりました。また、細い路地の奥にあった、私たち近所の子どものしか知らない、またそれだけしかかけがえのない子どもの社交場であった小さな駄菓子屋さん、ひっそりと廃業しました。それらは同時に、まぎれもなく小地域社会の崩壊を意味していました。

現代特有の社会問題がいくつも絡み合っているので、私の街に起こったこのような現象を、すべて道路舗装のせいにしていいとは思いません。しかし、地面の共有によって結ばれた子どもやお年寄りのつながりが、地域社会の大きな基礎、あるいはつなぎになっていたことは間違いないと思います。そのような条件の下では、子どももお年よりも決してムダに存在するものではないのです。

気持ちの断絶してしまった親子がカウンセリングに訪れた場合、カウンセラーは、どうしてもお互いが正面から向き合うことを促す場合が多いのですが、そのやり方が適していないと感じる場合も少なくありません。「親子が真正面から向き合う」というのはいかにも明快な言葉ですが、実際にはそれらはあまりにも困難なことであり、向き合わなくてすむならば、向き合わない方が幸せな場合も多々あるからです。親子ばかりではなく、自分自身と向き合うことすら、決して安易に勧められる道ではありません。それはある意味で特殊な関係のあり方であり、生きた地域社会はそうせずともやっていける道の人々に与えていました。

言いかえるならば、実質的に崩れてしまった地域社会の代わりに、その役割をカウンセリングという方法が十分に果たすなどということはありません。カウンセリングという方法が適用できるのは、実際にはかなり限られた状況や性質の持ち主に対してだけなのです。

「将来」のためではなく……

さて、述べてきましたように、子どもたちは実はきわめて大きな社会的役割を果たしていたわけですが、目に見えて何か有用なものを作り出しているわけではないので、その働きは非常にわかりにくいものです。そしてそのことは、あらゆる子どもたちを、受験という過酷で反人間的な競争へと追い込む、大きな原因のひとつになっていると考えられます。なぜなら、今現在何の役にも立っていないならば、ただひたすら「将来」のためだけに、何かをさせるしかなくなるからです。

「子どもの将来のために」という言葉は、日常生活にいたるまでの管理と、つめ込み勉強の強要、楽しみごとの剥奪といった、心という次元から見れば虐待そのものともいえる大人の行為を正当化し、同時に、実は世間体や将来の安定といった親の願望をも美化してしまっていますが、子どもたちの「今この時」の大切さに対してはますます目を閉ざさせます。子どもは決して、「将来」しかもたない存在ではありません。また「遊ぶ」ということは、子どもにとって生きる意味そのものですらあるのです。さらに心理学的な立場から見ても、「今この時」に本来すべきこと（というより心底したいと感じること）を充分にした先にしか、豊かな「将来」はありえません。

ここまで子どもという存在を中心に話してきましたが、よく考えていただければ、すべての話が、実は大人にも当てはまるものであるということがお分かりになると思います。地域社会の支えがなくなって苦しみ、ただ老後という「将来」のために正直な心押し殺して、ひたすら蓄財と健康に腐心するだけの虚しさを抱えねばならないということは、大人にとっても大きな問題です。

今日たくさん報告される児童虐待とは、社会に潜在する大きな虚無感という氷山の一角であり、大人の中にも住んでいる子どもの心、自然にあるがままの正直な心への否定が、あからさまに具現したものにほかなりません。

ただ、一部の人間がいくら「子どもの心を大切にしよう」と訴えても、社会全体からいかほども反応があるとは思えません。今日子どもたちがさらされている過酷な状況も、それなりに必然的な結果であるには違いないからです。

それよりも、荒唐無稽と思われるかもしれませんが、まずは道がアスファルトで覆われていない街づくりをしてみたらどうなるのかと、私は真面目に夢想します。